

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 23 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531153

研究課題名(和文) スズキメソッドによる「才能教育」モデルと教師文化の研究

研究課題名(英文) A Study on Suzuki Method - "Talent Education"- and its Teachers' Culture

研究代表者

桂 直美 (Katsura, Naomi)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：50225603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、スズキメソッド「才能教育」とは何かを、教師たちの間に共有されているエートス、すなわち行動原理となっている価値や信念という視点から明らかにする。スズキ教育論の原点を志向する夏期学校を日米において選び出し、そこに集う教師たちに行ったインタビューから、双方に共通する主題を取り出す事により、鈴木氏の「音楽を通じた人間教育」の哲学が教師たちにどのように受け継がれているかを明らかにした。そこでは、すべての子どもの成長を求め競争主義を否定する思想、「斉奏」の意義、教師同士が学び合い教え合う共同体のあり方、親としての成長、他者の尊重等の自覚が、「教師文化」として実践を支えていることがとらえられた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to characterize the Suzuki method - "Talent Education" - from the viewpoint of "ethos in the Suzuki teachers' community". For this purpose, I chose specific summer schools both in Japan and in the United States, which embrace the original Suzuki method. Semi-structured interviews were conducted with individual teachers and groups of teachers at both sites to extract common topics representing the teachers' values and beliefs. It became clear that the Suzuki method is oriented toward "music education as human education". The significance of playing in unison was demonstrated through teachers' narratives to embody the ethos of collaboration, co-learning, and co-development - openly rejecting the competitiveness so common in traditional music education. The potentiality of music for human society and education was corroborated by reciprocal teaching and learning in the Suzuki teachers' community.

研究分野：教育学

キーワード：スズキメソッド 人間教育 教師文化 ナラティブスタディ

## 1. 研究開始当初の背景

鈴木鎮一が創始したスズキメソッドは、バイオリンをはじめとした器楽教育であるが、人間教育としての音楽教育を強調して世界の多くの国において受容され、各国において多様な発展を遂げている音楽教育である。とりわけ米国においては公教育としての音楽教育にも関わり、弦楽器の専門教育においても「スズキ」がメジャーになっているほど、大きな影響を持つのに比して、日本国内ではより私的なバイオリンを中心とした演奏教育という見方に留まることが多い。また、早期英才教育との混同や、音楽教育専門家からの異端視など、様々な誤謬にさらされており、海外での評価の高さに比較して、国内においての理解が進んでいない現状がある。また、鈴木鎮一が人間教育としての音楽教育としてスズキメソッドを創始し普及し始めた当初と、今日の教育一般をめぐる思想的潮流の違いから、スズキメソッドを理解することが一層難しくなっていることも考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、スズキ・メソッドとは何かを、教師たちに共有されているエートス、すなわちスズキ教師コミュニティに固有の教師文化の視点からとらえ直すことである。

教師たちの間に内在化されているエートス、すなわち教育実践を支える行動原理となっている価値や信念に焦点をあてることで、スズキメソッドを、その教育哲学の次元から一つの全体として理解することができると思われる。

エートスとは、個々人の主観的な動機付けと価値が、形成された原体験に根をおろし個人の生に統合されているということと、なおかつそれが個人の価値意識にとどまらず、語り手から見て共同体意識を共有する仲間との間で共有されたものと考えられているという二重の性格規定を持つ。それは、教師が教育活動において用いている教育内容や指導方法とは区別されるが、それらを支え包含する教師の教育活動に関する信念、価値に関わるものである。これまでのスズキメソッドの研究が、主として、教則本の検討や実際の教授活動(レッスン)の分析からとらえられる特徴に焦点を当てたものであったのに対し、エートスの次元に光を当てることは、それらの先行研究を補完するものになり得ると言える。したがって本研究では、著書や教則本によらず、専ら教師たちが語る言葉による、ナラティブ研究の手法をとる。教師の語りから考察することは、鈴木鎮一の著書などの内容の重なりはあったとしても、鈴木個人の考えに閉じず、今日現在において教師集団に内在化されているものとしてのスズキ哲学を浮き彫りにすることができるからである。

## 3. 研究の方法

本研究でインタビューを行うにあたっては、スズキメソッドの原点を重視している教師たちのグループにアプローチすることを第一の条件とした。そのために選んだ場が、夏期学校である。

スズキメソッドでは、創始者鈴木鎮一が第一回の「夏期学校」を霧ヶ峰で開催して以来、教師たちと子どもたちと親たちが宿泊を伴う集いを持ち、鈴木鎮一の教育理念のもとで合同レッスンを中心とした音楽学習やその成果としての音楽演奏を行うことが年中行事になっている。日本においては、松本で行われる夏期学校がフォーマルな全国大会の役を果たしているが、それだけではなく、必ずしも毎年行われるのではないインフォーマルで臨時の夏期学校や、数人の教師たちが合同で合宿を行う小規模のものなど、様々な機会がある。夏期学校は子どもたちの成長を第一の目的とするが、同時に教師にとっても、他の指導者の指導を参観しつつ学び合う研鑽の場として意識されている、重要な機会である。ゆえに、教師の日々の実践のスタイルの元となるものとして共同で継承し維持している価値や行動原理を支える信念が具体的に把握されやすいと考えた。

そのために、スズキ教育論の原点を志向する夏期学校を日米において選び出し、そこに集う教師たちに行ったインタビューから、双方に共通する主題を取り出すことにより、スズキメソッドの哲学が、今日の教育の担い手たちにどのように受け継がれているかを明らかにした。

日本側では、2013年7月に青森県野辺地地区、馬門で行われた夏期学校を選んだ。この夏期学校は、鈴木鎮一から直接教えを受けた経験豊かな教師たち、および、そのような教師に学ぼうとする若手教師たちが、自分たちの研鑽も兼ねて計画したものである。これまでスズキメソッドの教室がなかったこの地(青森県)で、新たに教室が発足したのを機に、新任の先生の支援、新たにスズキメソッドに入会した父母たちの支援のために、子どもたちの指導(グループレッスン)を行うという目的を持って構成された、臨時の夏期学校という性格のものであった。

米国側では、2013年8月にシアトルで行われた「ジャパン-シアトル・スズキインスティテュート」を選んだ。これは、米国スズキ協会が認定している60の夏期学校の内の一つであるが、その中でも歴史が古く、鈴木鎮一に直接教えを受けた経験を持つ教師が多く集うことを特色としている。その名が示すように、日本から派遣されて夏期学校を創始した日本人教師たちと共に行ってきたもので、今回で23回の歴史を数える。第一回の1988年より、日本の草創期の霧ヶ峰の夏期学校を原型としてプログラムを組んでおり、規

模も大きくなならないように配慮をしつつ今日まで続いているものである。

双方の「夏期学校」の開催期間およびその前後に、教師たちにグループインタビュー及び個別インタビューを依頼した。日本では、夏期学校開催中に実施されたグループインタビューと個別インタビュー、及び企画準備の打ち合わせ段階における個別インタビュー、当日欠席者の個別インタビューを含む。米国では開催期間中のみで、教師の希望により個別インタビューが中心である。

#### 4. 研究成果

インタビューの語りから、特に教師の価値・信念・信条に関して重要と考えられる発言の内容に着目し、日米に共通するトピックを取り出したところ、以下の7項目に概念化することができた。

- 1 「人間教育」という理念
- 2 競争主義の否定
- 3 「親が育つ」ことの意味
- 4 より良き社会の追究
- 5 探究しつづける存在としての教師
- 6 言葉で言えないものへの希求
- 7 他者を尊重する鈴木鎮一の姿

1から4は、スズキメソッドの原理に関するもの、5から7は、教師の成長にかかわるものであるということが出来る。

次に、それぞれの項目について、語りに基づいた解釈と考察を加えていく。

##### (1) スズキメソッドの原理について

「人間教育」という理念

スズキメソッドが音楽教育であることは公然の事実であるのに、「音楽教室であってはならない」という言葉が語られた。その背景には、「音楽だけをやって」いるものと対置することによって、スズキの特徴を見出そうとする視点があることがわかる。それは、「人として立派に育つことを目的とするのであり、音楽を学ぶことを通してそれが達成される」という理解である。このことは裏を返せば、芸術教育であるはずの音楽教育が、教師や親の意識の中で、ともすれば音楽的な演奏のスキルや技能を身につけるというテクニカルな次元に収斂していきがちであることへの批判であるといえよう。

さらに、スズキメソッドで常に強調される美しい音の追究が、人間教育を体現するものとして次のように述べられていた。

「鈴木先生は『音は人なり』、『音は心の内を映す』と言っておられた。私達は『音にいのち在り』(living soul)とも言っていました。だから音のレッスンをしている時は、私達は人格教育をしているわけです。その子がそこに立って弾いていて、その音が良くなか

ったとすれば、それはその子らを反映しているということです。その子らは耳にしているものをよく感じていないということだから」

このように、「美しい音」は演奏の技術としてよりも、人間教育という目的と分かち難いものとしてとらえられていることがわかる。

##### 競争主義の否定

教師や親の協同的なかわりゆえに、ずば抜けた演奏をする子どもも奢ることなく、暖かい仲間意識の中で過ごしているという点に重きが置かれていることが、米国の教師から語られた。

日本側ではさらに、「斉奏」のありかたを説明しようとする文脈において、競争主義の否定が、互いを思いやる音楽の姿として次のように語られた。

「それはすごく大きな世代を超えた、能力別クラスではなくて人間クラス的なところがありますね。弾ける子、大きい子は自分のことを小さい子に与えようとするし、小さい子は大きい子に近づこうとする。(中略)すごく大きな環境だということに関しては、同じことを能力別ではなくて全体ですることが、すごく教育上大きな...。」

この語りには、個人の能力の違いを超えて、年齢の違いも超えて、多数の者が一緒に奏でる「斉奏」ならでは人間の力を教師が意識していることが表れている。さらに、それが「合わせる技術」としてではなく、グループレッスンを通して長い時間を共に成長している子どもたちが、互いを意識しながら互いに音を合わせていこうとする営みとして、時間的にも空間的にも大きなくりで語られていることにも着目したい。

##### 「親が育つ」ことの意味

スズキメソッドでは親に言及することが多く、親も成長の対象としてとらえている。米国側の教育歴40年の教師は、次のように親に言及した。

「鈴木先生は「誰ももの事を気にかけなくて駄目だ」と言った。また、「他の人が何かすばらしいことを成し遂げたことを」とも言った。西洋では、時として競争がありすぎる。一人が成し得れば他の人が成し得ないというように。しかし鈴木先生の考え方は「私もできる、そしてあなたもできる」というものだった。」

インタビューは、この語りにおいて、親の成長を、競争主義を乗り越える姿として見ていると解釈することが出来る。

スズキメソッドにおいて繰り返し口にされる「どの子も育つ」という言葉の重層的な意味の広がり、これらのインタビューを通して浮かび上がってくる。

##### より良き社会の追究

先の、親の成長について述べた米国側の教師の言葉は、さらに、より良き社会というビジョンにつながっていく。

日米双方の教師の言葉には、鈴木鎮一が音楽をとおした実践の向こうに平和な世界を願っていたという発言があった。

また、教師同士が、常に語り合い、アイデアも共有し合って共に成長することを当然と考えていることがわかった。その向こうには「ともに育ち合う」スズキメソッドの「大きなコミュニティ」のビジョンがある。それが、鈴木鎮一の理想とした「より良き社会」とオーバーラップすると理解することができよう。

このように考えると、スズキメソッドは、その原点においては 私教育 ではなく、むしろ 公共の教育 を目指したものであると 言うことができるのである。

## (2) 教師の成長について

### 探究しつづける存在としての教師

「子ども一人ひとりにあわせて、教師や親は創造的に工夫しながらかわっていく」という、特徴的なスズキの教師像、「探究し続ける人」という教師像については、色々なバリエーションで繰り返し語られている。次は、米国の教師の言葉である。

「鈴木先生は「学ぶことは変わることだ」と言われた。子どもたちにもそう教えるが、私自身、自分を変え、コンスタントに教え方を考え続け、もっと良く教えられるよう学ぼうとしている。なぜなら鈴木先生がコンスタントに考え続けていたから。私はそれを彼から学んだと思う。」

### 言葉で言えないものへの希求

一人の米国人の教師は、松本音楽院での鈴木鎮一の教育に触れて次のように述べている。

「誰も質問をしない。鈴木先生のところで、誰もノートをとらない。ただ観察して、何か理解できないことがあれば考える。観察し続け、考え、いつか理解できる。それが、彼（鈴木）の教師教育だった。」

鈴木から「授かったり、書かれたものがあったわけではない」と言うこの教師は、鈴木鎮一の教育に日本文化の要素を見出している。

決して言葉にできないものに直に接して学ぶというあり方は、スズキメソッドを方法次元の「メソッド」ではなく、言葉として読んだり聞いたりするものを越えた、生き方も含むものとして理解するゆえであると解釈される。松本音楽院で鈴木鎮一その人から直に学んだ経験にこだわる語り、日米の教師に共通して出ていることは特筆される。

他者を尊重する鈴木鎮一の姿  
教師たちは、どの人にも分け隔て無く同じ

尊敬で接する鈴木鎮一のエピソードを語っている。

人として区別なく接する鈴木鎮一の姿から、教師たちがあらゆる人への尊敬を学び取っていることは、次のような日本人教師の言葉にも表れている。

「逆に反対に、目下のものっていうのかな、そういう人たちも丁寧に本当に接してらっしゃいましたね。だから、本当に分け隔てのない方でした。」

「音楽を通しての人間教育」がスズキメソッドの基本であったが、それは生徒の教育だけではなく教師の成長にも通底する事が浮かび上がってきた。

## (3) まとめ

### スズキ教師コミュニティのエートス

スズキ教師コミュニティで共有されているミクロな「教師文化」、すなわち教師たちの実践を支える「エートス」に焦点をあてることで、実際的な指導方やカリキュラムといった「技術論・方法論」という次元での「メソッド」ではなく、教師たちによって受け継がれ育まれている価値観、信念の視点から、「人間教育としての音楽教育」という言葉の内実が明らかになった。

「どの子どもも育つ」という言葉を裏打ちするのは、誰をも尊重するという思想を生きる鈴木から直接受け取りはぐくまれたエートスであった。それゆえに、競争主義を排し、共に成長し合うことを喜ぶエートスが教師たちの間に形成されていたことも見てきた。また、個を尊重することから、教師が探究しつづける存在であるという価値規範が生まれていた。教師コミュニティが、互いに学びあい教え合うものとなっていることも、子どもたちの成長を互いに喜び合うことと同型のものとして、確かに共有されていた。

このようなエートスが教師集団に内在すること自体が、その教師集団の教育力の証左に他ならないとも言える。これが教師たちの日々の教育実践をかたちづけているのである。

### スズキメソッドの再評価と示唆

「人間教育としての音楽教育」という光をあてて見ることで、グループで弾き、教え、学び、親、教師、子どもたちが共に育とうとしているスズキの教育実践の全体を、総合的に理解することができた。斉奏の強調、親のかかわりなど、わかりにくさが伴った部分について、その意味と意義を理解することは、表面的な観察から生じた謬見の払拭につながると思われる。また「斉奏」に関しては、個々人の個性を生かし得ないという通俗的な批判に対して、それとは全く異なる側面が開示された。音を合わせるという音楽の共同創造行為は、そもそも個性的唯一存在である個々人が、各自の違いを違いとして抱えたまま

まで、互いに波長を合わせあって、他者の内的時間を共に生きるという主体的な行為と考えられる。能力も個性も限りなく異なる者たちが共にそのような一つの演奏を行うことの可能性を、スズキにおける斉奏は最大限まで追求し続けていると言える。

また、スズキメソードの原点に「公共の教育」としてのビジョンがあることも示された。ここには、音楽という他者との間に鳴り響く存在を追究した教育であるゆえに、鈴木鎮一の持っていた公共の教育の理念が様々な実践場面において具体的な形で実現されやすかったという、音楽の持つ可能性が示唆される。

#### 残された課題

今回検討したのは、スズキメソードの原点を志向する意識が極めて高い教師コミュニティにおける語りであった。すなわち、ここで共有されている価値観が、かならずしも今日のスズキ教師集団の全体で共有されているものではないということである。

逆に、このような原点における鈴木哲学を体現するエートスがどのようなものであるべきなのかは、スズキメソード全体に関して、今後意識化して取り組むことが求められる課題であるとも言えよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

桂直美、スズキメソード音楽教育論の原点を探る - 日米の教師の語りから見るスズキコミュニティのエートス - 、日本音楽教育学会編『音楽教育研究』、査読有、vol.45-1、2015年、pp.13-24

桂直美、「スズキメソード」の教育理念- ナラティブ分析による教師文化研究試論 - 、『東洋大学文学部研究紀要(教育科学)』、査読無、第66集、2013、pp.9-16

〔学会発表〕(計 2 件)

Naomi Katsura, The Living Educational Philosophy of the Suzuki Method; The Ethos of the Suzuki Teachers' Community, The 14th Hawaii International Conference on Education, 2015.1.7, Honolulu, (U.S.A.)

桂直美、スズキメソード音楽教育論の原点を探る - 「教師文化」から見るスズキメソード - 、日本音楽教育学会第45回大会、2013.10.13、弘前大学(青森県弘前市)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂直美(東洋大学・文学部・教授)

研究者番号: 50225603